Ⅰ　特集

感染症と社会システムにおける学校

―「学校論」再考への手がかりを求めて―

京都大学　小 松　郁 夫

１．本論文の目的と課題

(1) 地球上の生命の新たな状況を受け止める

2020 年は人類の歴史としてだけでなく、地球上の生命の歴史から見ても、画期的な１年となった。人類の歴史は進化と発展、継承の歴史であるが、その持続性が危ぶまれ、全世界的に危機に見舞われた１年であった。人類の生存や健康が「新型コロナウイルス」という未知のウイルスによる感染症によって脅かされ、大変な数の人々の命が失われ、健康と職業、人々のつながりなどが大きな不安の下に晒されて、それまで当たり前と感じていた日常生活（ノーマルな生活）がいや応なしに損なわれた１年でもあった。2021 年３月 24 日時点で、WHO の発表によれば、累計感染者数が１億 2341 万人を超え、死亡者数が 271 万人を超えたとされている[1]。私たちは、必然的に「ニュー・ノーマル」と称される、新しい時間の過ごし方や生き方を余儀なくされた。

地球上の生命史から見れば、個体としては平均寿命が百年足らずの生命しかない人類は、ウイルスという超微細なものの脅威を実感し、改めて生命やもろもろの事物の存在とその意味、大切さを実感する時間を過ごしている。この異常な時間は、まだ当分継続するような状況であり、「終息」はおろか、「収束」の目途もまだ立っていないように思われる。

(2) 教育と学習、学校への影響

この状況は教育と学習、学校という「組織」での教授・学習のあり方を考えてきた研究会と研究者にとって、その「新しい状況」について、さまざまな角度からの考察を試みる宿題を突き付けていると感じざるを得ない。著者がここで「組織」という概念にこだわるのは、社会システムとしての学校の存立基盤を組織性として捉え、本稿で扱うすべてのものを「組織」論として考察しようとするためである。すなわち、感染症の原因を生じさせている細菌やウイルスも、その災禍に苦悩する人類も、組織＝organization として論ずる手法を採用することとする。

Organization とは、COBUILD 英英辞典では the organization of something is the way in which its different parts are arranged or relate to each other（異なる器官（機関や部分、あるいは遺伝子）によって構成され、他と連携する特定の機能を有するモノ）との説明もあるので、多様な個によって構成され、互いに協働して機能するモノと理解できる。

この思考は、社会システム（組織）としての学校にも適用できると考える。すなわち、誕生か

ら始まって、繁栄や成熟を経て、衰退や消滅、あるいは次世代への移行、というプロセスを仮説的に設定できる。学校は 19 世紀後半から整備され、今や世界中のほとんどの地域で学習と教育の場として存在している。20 世紀の中で、何度かその存亡の危機もあったが、しぶとく生き残ってきている組織である。本稿では新たなコロナ禍で、個々人の生命と同様に、学校組織の「生命」のあり方を問い直し、「学校とは何か」という学校論再考の手がかりをつかみたいと考えている。

(3) 感染症研究と状況からのヒント

本節では感染症がもたらした状況を確認し、その意味する内実を多面的、多角的に解釈し、導き出しうる知見を明確にすることによって、「社会システム」としての学校の意義と成果、新しい状況下でのあるべき姿を再考する手がかりをつかみたいと考えている。

そのためには、感染症に関連する生命科学の知見を咀嚼し、科学的成果を学ぶことを通して、「学校とは？」という教育研究の重要な視点に対するヒント、再考の手がかりを探ることから始める。生命科学的思考が身に付けば、ビジネスと人生の「見え方」が一変するという問題提起を積極的にしている髙橋祥子は、その著書『生命科学的思考』の中で、生命は「失敗許容主義」を貫いているとか、多様性の本質は「同質性」である、といった重要な問題提起を行っている[2]。正解主義を基本として来た学校、多様性と同質性の両義性に悩んでいる学校の考察といった視点からも、生命研究や感染症とその原因となるウイルス研究での知見は、きわめて合理的かつ科学的で、説得的な理論と知見を提供してくれていると考える。本稿では、それらの成果を学ぶことを通して、「社会システムとしての学校」の新しい未来像を探究したいと考える。

(4) 生命科学的思考と学校

学校という組織（社会システム）を生命科学の視点で考察すれば、学校（生命）の原理を新しい視点と手法でアプローチできるのではないかと期待できる。髙橋の言葉を借りれば、生命（本稿では学校という組織）の原理や原則を知るとは、「生命の原理や原則を客観的に理解した上で、それに抗うために主観的な意志を活かして行動できる」[3]ということである。生命原則を客観的に理解し、視野を自在に切り替えて思考することで主観を見いだし行動に移せば、自然の理に立脚しながらも希望に満ちた自由な生き方が可能となるという見方ができるのである。

髙橋の生命科学的思考を援用すれば、「視野を自在に切り替えて思考する」ことを意味する。「そもそも思考というものは、生物学的には多くのエネルギーを消費する行為です。したがって、思考しなくてもよい環境であれば生物は極力思考をしないことを無意識に選択します。（中略）私たちが思考するためには、エネルギー効率を高めようとする生命の原則に意識的に抗う必要があります。これには大変な努力と覚悟が求められ、効率はよくありません。しかし、遺伝子に抗って思考するという非効率的な行為こそが、人類にとって唯一の希望であると、私は考えます。人類はより多くの知恵を得て、飢餓や疫病から自らを守り、今や生命や宇宙の新たな可能性にも切り込んでいます。生命原則を受容した上で、主体的に思考して学習し前に進み続けることで、次々と現れる課題を解決できるはずです」[4]と考えられる。

今回の感染症拡大は、グローバル化した社会がもたらした状況であることも無視できない。さらには、都市化と少子高齢化による不均衡な社会発展、人権尊重と公共の福祉のバランスの難しさ、新自由主義的政治経済構造などの複合的社会変容の問題が複雑に絡み合って、効果的な対策の実施を迅速に行いえない時代状況や背景も視野に入れて考察をする必要がある。

２．新型コロナウイルス感染症の特徴

(1) ウイルスと人間

山本太郎は『感染症と文明』の副題を「共生への道」とし、第１章を「文明は感染症の『ゆりかご』であった」と書き出している[5]。同様の記述は、石弘之『感染症の世界史』やウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』（上）（下）、村上陽一郎『ペスト大流行』などにも共通な歴史的観点である。感染症に対するこの歴史的認識は、教育の課題を考え、科学的知識や見方を学ぶ上で、非常に重要な認識である。正しい知識を獲得し、それを基礎として生きていく力を身に付け、真理を探究するという「学びに向かう力」は欠かすことのできない教育と学習の原理である。

問題のウイルスは細胞生物のすべてに寄生している。増殖は自己の内部ではできないので、ウイルスの増殖は宿主の細胞内で行われる。ウイルスは細胞に対して通常の仕事を中止させて、自分の増殖に必要な素材を提供させ、細胞のエネルギーを利用して自分のコピーを作成する[6]。細胞の正常な機能が損なわれ、ときには細胞が破壊されてしまうのである。さらに次々と周辺の細胞に感染を広げて自分のコピーを作っていき、重症化するなど最悪な場合、組織全体が壊されていき、死に至らしめる危険性が増すのである。ウイルスはほとんどの場合、口、呼吸器、消化器、泌尿・生殖器、目のように、外界に開いている部位の粘膜から侵入する[7]。新型コロナウイルスの感染も、口や鼻などを通して感染するようである。それゆえ、うがい、手洗い、マスクの着用などが推奨され、ウイルスの飛沫が感染しやすい距離がソーシャルディスタンスと称されて、厚生労働省などから３密（換気の悪い密閉空間・多数が集まる密集場所・間近で会話や発声をする密接場面）にならないよう注意喚起がされている。対面で、同じ空間と時間を共有することを通してコミュニケーションを図ってきた人間とその社会にとって、根底的な存立基盤を脅かすような危機に、現在私たちは遭遇している。

(2) 生命と生命体（生物）の代謝・エネルギー・材料

ウイルスはどこから来たのか、ウイルスは生きているのか、などという疑問は「生命とは何か」や「生命はどうやって誕生したのか？」という形で表現できる。山内一也は著書『ウイルスの意味論』において、生命も生物も英語ではライフ（Life）であることに注目する[8]。また、『生物学事典　第５版』（岩波書店、2013 年）では「生物は生命現象を営むもの」と述べ、生命については生物の本質的属性として抽象されるものとしていることや、『哲学事典』（平凡社、1971 年）では、生命は「生物にのみ固有の属性。もしも生命の概念を前提として生物を定義し、生物の概念を前提として生命を定義するならば、それは循環論であるが、われわれは現代科学の認識の上に立っ

て、まず生物を、地球の歴史の一時期において発生しそれ以後に発展を続け、相互に歴史的な関連をたどりうる一群の物質系として定義することができる」と踏み込んでいる[9]。

2011 年、イスラエル・ハイファ大学進化研究所のエドワード・トリフォノワは、123 の（生命の）定義から「生命は、変化（進化）を伴う自力増殖が可能で代謝活性のある情報システムであって、エネルギーと適切な環境を必要とする」という文言を候補に選んだ。これをさらに簡潔にするために、“代謝”の存在には“エネルギー”と“材料”の供給が含まれ、これらは“環境”も表していると判断した。つまり、自己増殖は代謝システム、エネルギー、および材料供給があって初めて可能となると考えた。このような作業の結果、最終的に生命は「self-reproduction with variations（変異を伴う自力増殖）」という３つの単語に集約された。このように理解すると、「生物」ではないが、「生命」を持つウイルスと宿主である細胞、さらには変異という現象も、良く理解できる。1924 年、ソ連の生化学者アレキサンドル・オパーリンが述べた「複製と変異が可能なシステムはすべて生きている」という考えや進化生物学者のジョン・メイナード・スミスが、生命を「増殖、遺伝、変異の性質を持つ実体」としていることも同様である。この条件であれば、ウイルスも「生命」としてあてはまる。これが山内の解説である[10]。

また、山本太郎の『疫病と人類』によれば、人類の歴史上、「農耕の開始は食糧増産と定住をもたらした。食糧増産と定住は人口増加をもたらし、これが新たな感染症の流行に格好の土壌を提供した。一方、野生動物の家畜化は、耕作面積の拡大などを通して食糧増産に寄与した。同時に、本来野生動物を宿主とした病原体は、ヒトという新たな宿主（生態的地位）を得た。病原体は、新たな生態学的地位を得て、その多様性を一気に加速させた」[11]という。しかも感染症は、20 世紀後半に入って、さらにその質と量を変えている。過去半世紀ほどの間に出現したウイルス性感染症としては、エボラ出血熱やエイズ、ウエストナイル熱、SARS、鳥インフルエンザ、MERS、ジカ熱などが知られている。黒木登志夫のいう「新型コロナウイルスには兄弟がいる。SARS, MERS のワル三兄弟だ」[12]との指摘から、問題のウイルスの系譜が理解されよう。

新たなウイルスの出現は、人口増加や成長を続ける経済と開発、その結果としての地球温暖化等の環境破壊によって、生態系が破壊され、自然の調和が乱されてきたという現象ゆえの新たな感染症拡大とも考えられる。人間の英知が試されているのではなかろうかと危惧される。

こうした知見から援用すると、学校を生きて働く「生命体」とみなせば、施設設備を始めとする教材教具などが「材料」提供され、教授=学習活動という動き、「エネルギー」が生まれ、成長発展や資質能力の向上といった個人内での知育・徳育・体育などの「代謝」がなされていると見なせないこともない。

(3) 細胞の研究から見る「生命」と「社会」

吉森保は『ライフサイエンス』の中で、「細胞がわかれば生命の基本がわかる」として[13]、細胞はひとつひとつが生きているから生命の基本単位であり、「人間のはじまりは、卵子という一つの細胞です。その卵子の中に精子が入って受精すると、受精卵が成長を始めます。細胞分裂が始ま

り、倍々に分裂していって、最終的に 37 兆個にまで増えます」[14]ということや「細胞の中は『社会』」であり、細胞生物学者からすると「宇宙」に見えるという。そして、「細胞の中に広がるのは、人間が生きる『社会』にとても似ています」と解説する[15]。

細胞と人間およびその社会のたとえは、細胞小器官であるオルガネラが社会の中の機関であり、工場や発電所、病院などの施設、そこで働いている人はタンパク質であるとされる。すなわち、人間社会では「人」が主役であるように、細胞の中ではたんぱく質が主役、と説明される[16]。

感染症との関係で、細胞に対する理解を踏まえて、人間の姿やそのあり方、さらには人間の集団である社会の姿を解析する吉森の考察は、教育と学習、学校のあり方などを考察する我々の思考にも、いろいろな示唆を与えてくれる。コロナ禍は、専ら人の流れ（人流）によって感染拡大がなされたというが、学校という組織にも、この「ながれ」はさまざまに存在する。もちろん人流はある。教授・学習過程には、知識や情報が流れて（交流されて）いる。この流れの中に間違ったものが入り込んでいると、人々を間違った方向に導き、期待されている正常な機能を阻害し、混乱や機能不全をもたらしかねない。

筆者はいわゆる「学級崩壊」調査に際して、生命科学から貴重な示唆を得た経験がある。学級や学校を「組織」として認識し、「生命」あるものと仮定した上で、「学級崩壊」は組織の体調不良や不健康な状態と捉えてみたのである。このようなアナロジーを活用すれば、いわゆる「学級崩壊」は形や機能をなくすような「崩壊」ではなく、「学級がうまく機能しなくなる状況」と定義づけることができる。また、個体としての人間を生命論の視点から見ると、生命体であるとみなされた学校組織の場合、活動や機能を支持するのは、遺伝子に組み込まれたプログラムではなく、脳の器官が行っており、エネルギー供給は心臓部が役割を果たしているとみなすこともできるのではないかと考えた。学校論で、個体の器官部分である脳が校長で、心臓は副校長（教頭）なのではないかと筆者がアナロジーしたのも、生命科学の知見からヒントを得た発想である。

これまで生物の進化がなぜ起こるのかはまだはっきりとわかっていないといわれるが、一つだけはっきりしていることがあり、それは「生物の生き残りにはダイバーシティが欠かせないということです。多様性こそ、生命存続の鉄則です」、「ある生き物の集団が生き残るにはいろいろなタイプがいたほうがいいわけです」、「多様性がないと死に絶えるのが生命の本質です」と吉森は強調する[17]。学校論のヒントともなる重要な指摘である。

（4）生命の多様性、階層性、動的平衡

生命には「多様性」の他に「階層性」という重要な特徴もある。それは体の中にある、ものの「大きさ」で把握や分類してみると明白である。小さい順に、高分子（タンパク質など）⇒超分子複合体（ウイルスや菌など）⇒オルガネラ（細胞小器官）⇒細胞⇒組織・臓器（心臓、肝臓など）⇒個体（１人の人間）⇒種（人類、魚類など）と整理できる[18]。それぞれの標準的な大きさは、黒木によれば、新型コロナウイルスは直径 125nm（ナノメートル＝100 万分の１ミリ）程度の粒子であるのに対し[19]、吉森によれば、ミトコンドリアなどのオルガネラは約 0.5 μm（マイクロ

メートル=0.001 ミリ）程度で、細胞の場合は数 10μm ほどであるという[20]。感染症の問題は、巨大な人間が、極小で、電子顕微鏡でどうにかその姿を確認できるウイルスに悩まされるという大小関係の中での苦悩なのである。

さらにもうひとつの特徴は、中身が変わっているのに、見た目は変わらないことを表す「動的平衡」の概念である。この生命の営為を「動的平衡」と名付けた福岡伸一は、生命が自らを常に壊し分解しつつ、作りなおし、更新し、次々とバトンタッチするという方法をとること、「この絶え間のない分解と更新と交換の流れこそが生きているということの本質であり、これこそが系の内部にたまるエントロピーを絶えず外部に捨て続ける唯一の方法だった」と説明する[21]。

動的平衡の考え方は、古くはギリシャ時代のヘラクレイトスの「万物は流転する」という有名な言葉とも関連する。これは「世界はたえず変化し続けている」という意味で、「変化」を問題にしている思想である。福岡も指摘するように、人間は時間とともに細胞が入れ替わり、変化しているが、同じ「私」であることに変わりはないという考え方である。日本では、1212 年に鴨長明が書いた方丈記の冒頭の文、「行く河のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」が有名だ。仏教的無常観を主題に、鴨長明が体験した壮絶な人生や五つの厄災など、「災害文学」とでも言える内容で、自分の人生を振り返り描かれている古典日本三大随筆の一つである。

教育改革を議論する過程でしばしば語られた言葉に、「不易と流行」という言い方がある。動的平衡論やヘラクレイトス、鴨長明の哲学や思想と対比させると、「不易」か「流行」かではなく、「不易のように見えて流行していること」と「流行しているようで不易なこと」の両面が考えられるのではなかろうか。昨日の学びと今日の学びと明日の学び、昨日の子どもと今日の子どもそして明日の子どもは、同じように見えて、絶えず変化しているとみなせるかもしれない。学びは既存の知識などへの追加、更新、破壊であり、他者や環境などとの交換、活用、開発、共創であり、その過程を経て創造、廃棄、変化、飛躍を不断に行っているのかもしれない。

福岡は動的平衡の考えを人間の営み、人間の組織に応用することを試みている。福岡によれば、生命の動的平衡は自律分散型であり、「個々の細胞やたんぱく質は、ちょうどジグソーパズルのピースのようなもので、前後左右のピースと連携を取りながら絶えず更新されている。ピース近傍の補完的な関係性（相補性）さえ保たれていれば、ピース自体が交換されても、ジグソーパズルは全体としてゆるく連携しあっており、絵柄は変わらない。新しく参加したピースは、郷に入れては郷に従うの言のとおり、周囲の関係性の中で自分の位置と役割を定める。既存のピースは、寛容をもって新入りのピースのために場所を空けてやる。こうして絶えずピース自体は更新されつつ、組織もその都度、微調整され、新たな平衡を求めて、刷新されていく。そして個々のピースは、いずれも必ずしも鳥瞰的に全体像を知っている必要はない。ローカルで、自律分散型で、しかも役割が可変的であること。これが生命体の強みである」と説明される[22]。

いずれにせよ、組織を構成する各個人が、「自律分散的に可変成性・相補性をもって状況に対応できれば」最強の組織活動が実現できると考えられる。福岡は、サッカーの岡田武史監督との対

談で、動的平衡論の意義を評価されたと紹介している[23]。

３.「ニュー・ノーマル」な学校教育は創発できるのか

(1) 新実存主義と 21 世紀社会

感染症の問題は生命、細胞、生物、組織という科学的な知見への関心を高めただけではない。むしろ深刻化したのは、科学と政治、科学と経済、科学と生活や人間関係に対してである。例えば、「まず専門家の意見を聞いて、最終的には政治（首相）が決断をします」という物言いは、科学的知見と政治の関係を物語っており、「マスク会食」が推奨され、学校では飛沫感染を警戒して、合唱指導が禁止されたりしている。「主体的、対話的で深い学び」を推奨する新学習指導要領が本格実施の時期なのに、机を向き合わせての学びも当分の間できなくなっている。

感染症の問題は、科学的概念や知見で語られ、物理的・生物学的プロセスから理解と判断がなされるのが常道である。しかし、日々の生活を積み重ねている一般の人々の意識や目からは、人間の現実や経験の理解において、どのようにして欲求、信念、志向のような心的状態が生まれ、理解されるのかは十分に解釈ができるとは言えない。ボン大学哲学科教授のマルクス・ガブリエルは、今日の 21 世紀社会の特徴と課題を「新実存主義」という立場から、独自の見解を展開する。ガブリエルの「臨床哲学」とでも言うべき思考について、NHKBS１スペシャルの番組制作班は「欲望の民主主義」「欲望の資本主義」「欲望の時代の哲学」をキーワードに放送を開始し、2020 年 10 月には「コロナ時代の精神のワクチン」をテーマに新しい番組を放映した。

21 世紀社会の課題は資本主義や民主主義の今日のあり様を危惧し、課題を析出することではないかと筆者は考えている。その問題意識からすると、21 世紀のための新しい存在テーゼを模索するガブリエルの斬新な哲学的思考は、非常に示唆に富む内容を含んでいる。

ガブリエルはまた、「自然」と「計測可能な宇宙」に分けて考え、後者の「宇宙」は「自然の中にあるものの科学」であり、自然ではないこと、数学的に表現できるパターンであるという。それに対し、「自然」は「宇宙」よりも深くにあり、数学ではアクセスできないところに位置していること、「自然は私たちの経験の質である」[24]ともいう。ガブリエルは「私は自然科学とテクノロジーに反対しているわけではまったくありません。しかし、それらは哲学が目指すところに誘導されるべきだと思っています」と言う[25]。さらには、カール・マルクスの「宗教は民衆のアヘンである」と意識して、「科学は民衆のアヘンである」と語り、感染者数や死亡率、再生産率などに振り回され過ぎている現状に疑問符を投げかけている。それは、感染症対策として医学などの助けを軽視していることではなく、自然科学だけでは新型コロナウイルスの問題を解決できないこと、そもそもなぜワクチンが必要なのか、それはどの程度有効で、いつできるのか、また、どのように配るのか、そしてその資金はどこから持ってくるのか、などといった問題は、自然科学の問題ではなく、政治的な問題でもなく、「倫理的な問題であり、だからこそ哲学の問題なのです」[26]と語り、多角的に考える必要を説いている。

(2) 動的平衡（福岡伸一）と絶対矛盾的自己同一（西田幾多郎）

質よりはまず量を重視する考え、科学的な法則「のみ」がすべてを支配するという考えへの疑問は、動的平衡の考えで生命をめぐる思索の旅を深めてきた福岡伸一が哲学者の西田幾多郎の思索と向き合って考えてきた発想に似ている。福岡は、西田の弟子でもある池田善昭との対話で、次のような交流をしている。池田が語る「普通、私たちは、コンピュータを使って表される世界というのはすべて数学的世界で、分析的に到達できる、きわめて合理的なもののあり方を示す世界と理解しています。そして、それによって得られる真理や事実（数字）などを私たちは『客観性』を担保するものだと考えているわけです」[27]という話に福岡は同意する。それに対して池田は、「多くの人は、数学的思考というのは、計算すれば明確な答えが出てくるものであり、その答えの導き方の道筋において、そこに一切の矛盾を含まない合理的な思考のことだと理解していて、これこそが最も客観性を得やすい考え方だと思ってきたのです。ところが、そういった考え方は実は人間の主観（性）のもたらす思考法（『主観性の原理』ともいう）であって、その思考法の中にピュシスが持っている、つまり、自然本来が持っている実在・リアリティというものは実は失われているのです」と改めて西田哲学の重要な視点を解説している[28]。同時にまた、20 世紀の著名な哲学者ハイデガーの「現存在」としてのリアリティが失われていく現代社会を危惧している。西田哲学では、「『現存在』とは、大まかに言えば、まさにいま生まれつつある存在、ありのままに起きている（「生起」的な）存在のことです。リアリティの根拠は何かと言えば、そうした現存在の自然的な「生起」のただ中にあるものであり、ピュシスの内にこそあるものです。真のリアリティそれ自体が自然の中にある。そのピュシス、自然というものが西洋形而上学の歴史の中ですっかり忘れられていくわけです」とも考察している[29]。

池田はまた、自らも「時間と空間」というときの「と」という問題について思索する。いわば、A と B という「あいだ」の思索を重ねる。「時間と空間」というときの「と」というのは、時間でも空間でもない、時間と空間の「間」であるという認識を持ちだす。「要するに時間と空間というのは、次々に起こる存在の秩序というものと、同時に存在する秩序のことである」[30]と考えたのである。これこそ、西田哲学でいう「絶対矛盾的自己同一」的な事態であると考えられる。時間は空間に包まれながら、実は逆に空間を包んでいること、福岡のような生命科学者にとっては、細胞の内部と外部のあいだに膜というものを考えており、その膜というのは内部でも外部でもないけれども、そこにおいて内部と外部がつながっている、言わば、「包まれつつ包む」仕方で一つになっていること、しかもその膜自身も、絶えず流動していることと考えられている。

(3)「と」の学校経営学と「あいだ」の教育経営学

「と」と「あいだ」という視点に関して思い出したのが、大学院時代の指導教官の吉本二郎と永岡順の恩師２人である。吉本は、ゼミの発表や論文のタイトルに、「と」が登場すると、いつも「その A と B の関係はどうなっているか」という質問を浴びせていた。例えば、「教育委員会と学校の相対的自律性」を論じようとするとした場合、教育行政機関としての「教育委員会」そのも

のと個々の「学校」そのものの位置づけを明確にし、その関係性を考察することが課題となる。この場合は、例えば、前者の教育委員会が後者である学校（公立学校の場合）の「設置者」であるという規定の意味するものを分析しなければならない。同時に、学校教育の基本である教育課程は学校において編成する、とされている規定をどのように具体化するかが問われることとなる。リーダーシップ論で、校長と所属職員との関係のあり方も整理される必要がある。「と」は、前者が後者を包むこともあれば、前者と後者が対立的に位置づけられる場合もある。京都府の出身で京都大学での研究に関心が強かった吉本が、どの程度西田を始めとした哲学の京都学派を意識していたかはわからないが、生きた時代背景を考慮すれば、なにがしかの意識や影響があったのではないかと気づかされる。

それに対し、永岡は、アメリカでの在外研究を経て、盛んに「あいだ」を意識した研究と著作を重ねてきた。永岡は、「シリーズ　教育の間」の刊行を企画し、『校長・教頭と教師の間―学校経営の再建』等をまとめている。「あいだ」には、福岡と池田の交流にもあるように、内部と外部のように、何かの境界があるようにもみなせるが、本質的には、「包みつつ包まれる」という見方の方が適切と考えられ、「あいだ」感覚を研ぎ澄ませば、教育界で重視されている「指示」、「指導」、「助言」、「支援」などの、独特な関係を表現する用語が意味を持つといえる。永岡が校長や教頭の管理職と教師の「あいだ」を論理的にどのように整理しているかは、書いているものを的確に理解すればわかるであろうが、少なくとも一般行政機関や民間企業などでの上司と部下の関係と同質とみなしていなかったことは理解できる。

吉本も永岡も、第二次世界大戦（太平洋戦争）の前後の時代を生きてきた世代であるので、現代日本を創った思想と文化として重要な概念である「戦後民主主義」という「理想」を体現していたが、今、その理想が傷だらけになっているという指摘もある[31]。学校経営の民主化、民主的意思決定、などという表現は、今では書名にも論考にもほとんど見かけなくなった。終戦後 75 年も過ぎたという時間の経過だけでの変貌でもないと思う。

新しい教育学研究では、コロナ禍で得た経験知と 21 世紀社会の新しい社会理論を踏まえて、現代にふさわしい「と」と「あいだ」の議論を深めていかなければならないといえる。

（4）学校の「新しい生命体的」生き残り方

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、学校の一斉休校は、文部科学省や専門家などの意見を聞くことなく、ましてや、全国の学校現場の状況を的確に把握することもなく、2020 年２月 27 日に突然に安倍首相（当時）から発表された。文科省がそれを知ったのは、当日の午前 11 時８分、文科次官に伝えられたという。文科大臣と事務次官は、全国一斉の必要がないこと、検討すべき点が多々あること、混乱を避けるために準備期間の必要なことを安倍首相に述べ、「本当にやるのですか」と問い詰めたという。それに対して、首相は国の責任ですべてをやると答え、その日に開かれた政府対策本部会議で全国のすべての小中高等学校、特別支援学校の３月２日から春休みまでの一斉休校を要請した。

その後、５月 25 日、安倍首相は緊急事態宣言を解除できたのは、「日本モデルの力」であると誇らしげに宣言した。しかし残念ながら、感染拡大の波は収まるどころか、ぶり返し、2021 年１月 13 日（水）、 東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県に１都３県に続いて、 栃木県、愛知県、岐阜県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県にも再び緊急事態宣言が出された。今回はさすがに学校の休業は要請せずに、一定程度対象や緊急措置の要請を限定することができている。

しかし、11 都府県なのだから、47 都道府県中 11 だけで、11/47 の４分の１弱とみなされがちだが、実は 人口でみると、7,016 万人（2019 年 10 月１日現在）、全体の 55.6%、日本の半分以上が対象である。一方、地図上で眺めると、55,673 ㎢、国土の 14.7%、7 分の１程度であり、日本地図を色塗りすると大したことはないように感じるかもしれない。しかしこれも経済的なデータなどから見ると、県内総生産（2017 年度：県民経済計算）では、335 兆円、全国の 59.7%、約６割、県民所得（同）では、254 兆円、全国の 60.6%、６割超に相当する[32]。データ作成とデータ解釈に十分な注意を払い、可能な限り正確に、合目的に活用を心がけないと危険である。

哲学者マルクス・ガブリエルは、21 世紀社会の状況を「新実存主義」の立場から俯瞰し、「新実存主義とは、『心』という、突き詰めてみれば乱雑そのものというしかない包括的用語に対応する、一個の現象や実在などありはしないという見解である。ふつう『心』という看板でひとくくりにされている現象は、明らかに物理的なものも現実に存在しないものも幅広く含む、ひとつのスペクトル上に位置づけられると考えるのだ」という[33]。コロナ禍でのデータや情報に対して、その根拠、出典や意味をより深く考えると、数字で示された「科学的根拠」なるものの不確かさがにわかに浮き上がるように、『心』という包括用語でひとまとめにされるさまざまな現象は、一個の明確な輪郭をもつ対象や対象の範囲を拾い上げるものではない」[34]、のである。

(5)「安全」だけでなく「安心」の「心」の保障

災害や危機の時に、しばしば「安全と安心」という表現が使われる。「安全」は一定程度、量的、明示的、具体的に示すことができようが、「安心」は各個人の「心」のテーマであり、数量などで明示的に示すことは難しい。教育場面で主に扱うのは、「心」に深く関わることである。

幸い我々は時代認識において新しい哲学の知見を知ることができ、歴史学において過去の反省も踏まえた時代認識を獲得しつつある。多様性を尊重する世界を構築しつつあり、グローバル化によって、ヒト、モノ、カネだけでなく、情報の一体化、外交や安全保障面での連帯や相互協力を試行錯誤しながらも構築してきている。心配される国家間の対立や葛藤があるものの、それを乗り越えようとしている優れた知性もしっかりと芽生えてきている。地球環境の保護などにあっては、危機感も高まりつつあり、SDGs のような具体的な目標等も明確化されて来ている。

山内一也は、現代社会が招くエマージングウイルスに関して、感染症の克服は幻想であり、科学的に的確な認識を深める必要があると強調する[35]。すでに、1993 年、WHO と全米科学協会はエマージング感染症の国際監視計画に関する会議を開き、「最近になって新しく出現（emerging）、または再出現（re-emerging）した感染症が数多くある。動物や植物の世界でも同様のことが起き

て、経済や環境に危険をもたらしている。世界全体がいまだに感染症に対していかにもろいかということを示している。ヒト、動物、植物の感染症の地球規模での監視体制の確立が急務である」という声明を発表している[36]。

山内はエマージング感染症の出現（伝播）の主な背景と原因として、野生動物の輸入【原因:実験用サルの輸入、以下同様】、公衆衛生基盤の破綻【院内感染】、ダム開発【人と家畜の大移動】、医療技術【血液製剤】、気象変化【エルニーニョ、温暖化】、グローバリゼーション【動物市場】、近代畜産【肉骨粉の利用、養豚場の拡大、大規模養鶏、大規模養豚】、ペットショップ【野生動物の雑居】を示している。ほとんどが社会の「進歩や発展」として確認できる現象である[37]。

専ら密集した空間での教授・学習に専念してきた既存の学校は、新しい状況の中で革新的にそのあり様を変化できるであろうか。全国一斉休校や「新しい生活様式」に合わせた学校運営の舵取りなど、今回のコロナ禍での学校マネジメントや学校運営そのものへの影響について、加藤崇英は「『コロナ禍』に焦点化するのではなく、危機管理の一部としてとらえたマネジメント」を提起している[38]。確かに、現状の学校マネジメントの課題や取り組むべきテーマには平常時との共通性や一貫性が存在する。この１年間の日本中の学校が示した感染症に対する危機対応は、諸外国と比較しても、見事なものと言えるし、管理職と教職員が一体となって「チーム学校」としての対応は素晴らしいものが実現できているといえるだろう。

(6) 感染症と共生するための社会システムについての提言

それでは、共生するための社会システムとしての学校を構築するには、何を変え、何を変えないのがよいのだろうか。第一は教育と教育行政の地方分権を少しでも推進することである。2020年３月の全国一斉休校では、いろいろな事情や特色がありながらも、ほとんどの自治体と学校が休校措置をとった。準備も対策も極めて不十分なままでの突入と言えた。2021年１月からの対策は、地域を限定し、いろいろな細心の注意と準備をしながら、効果的に施策を打てたことは、危機管理からしての自主的、自発的判断として評価できる。今後は、学校環境のデジタル化の早急な整備と使いこなすための研修や臨機応変な対応が必要である。

第二は改革に当たっては働き方改革との連動が必須である。元々、強く望まれた改革課題であるから、連動できる国からの支援策も絶対条件である。この度の感染症は、多くの人々の仕事についての考え方を変えたと思われる。やればできた改革が少なからずあったはずである。それができないようでは、コロナ禍から学んだとは言えない。短期的視点だけでなく、中長期的視点で、業務の見直し、働き方改革を実行すべきである。

第三は「個別最適な学び」と「協働的な学び」を対立的に捉えるのではなく、正―反―合として、弁証法的に把握し、実践することである。教授・学習や教授＝学習、などと表記するが、教えることや学習を支援することが学習者の主体性を尊重し、意思や意欲を喚起して、往還的にこの流れが進行させることが重要である。

コロナ禍にあって、小中学生の教育はクラスでの対面教育ができなくなったこともあった。そ

の場合、子どもの間で学習面などで大きな差が付く心配がある。十分な予防対策をした上で、学校で教育を再開するのは正しい選択であるとの判断が可能な限り優先させられるだろう。根本的には、定められた場所で、定められた内容を、一斉画一的な処方で学ぶ風景は、明らかに時代状況にそぐわないことが見えてきた。GIGA スクール構想が進展しても、テクノロジーだけに着目せず、システム全体を思考することを忘れてはならない。

本論考は、人間の教授・学習やその効果的な場として開発された学校のあり方に関して、生命科学や新実存主義哲学などの知見を援用して考察を試みたものである。最終目的は、あくまで人間の成長や発達の本質ともいえる教授・学習の意義を改めて確認し、その場としての「学校」とは何かを再考する契機や手法などを確認することである。

参考文献

・池田善昭・福岡伸一『福岡伸一、西田哲学を読む　生命をめぐる思索の旅　動的平衡と絶対矛盾的自己同一』小学館新書、2020 年。
・石弘之『感染症の世界史』角川ソフィア文庫、2018 年。
・内海孝『感染症の近代史』日本史リブレット 96、山川出版社、2016 年。
・大野和基編著『コロナ後の世界』文春新書 1271、2020 年。
・カミュ著、宮崎嶺雄訳『ペスト』新潮文庫、1969 年。
・マルクス・ガブリエル著、清水一浩訳『なぜ世界は存在しないのか』講談社選書 666、2018 年。
・マルクス・ガブリエル著、大野和基訳『世界史の針が巻き戻るとき―「新しい実在論」は世界をどう見ているか―』PHP 新書 1215、2020 年。
・マルクス・ガブリエル著、廣瀬覚訳『新実存主義』岩波新書 1822、2020 年。
・丸山俊一・NHK「欲望の民主主義」制作班著『マルクス・ガブリエル　欲望の時代を哲学する』NHK 出版新書 569、2018 年。
・丸山俊一・NHK「欲望の民主主義」制作班著『マルクス・ガブリエル　欲望の時代を哲学するⅡ―自由と闘争のパラドックスを超えて―』NHK 出版新書 620、2020 年。
・丸山俊一・NHK「欲望の民主主義」制作班著『マルクス・ガブリエル　危機の時代を語る』NHK 出版新書 635、2020 年。
・丸山俊一・NHK「欲望の時代の哲学」制作班著『マルクス・ガブリエル　新時代に生きる「道徳哲学」』NHK 出版新書 645、2021 年。
・丸山俊一・NHK「欲望の民主主義」制作班著『欲望の民主主義―分断を越える哲学―』幻冬舎新書、2018 年。
・川崎雅和編著『コロナと闘う学校―全国 120 校が直面した課題と新たな教育環境の可能性―』学事出版、2021 年。
・黒木登志夫『新型コロナの科学―パンデミック、そして共生の未来へ―』中公新書、2020 年。

・小松左京『復活の日【新装版】』ハルキ文庫、1998 年。
・斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書 1035、2020 年。
・左巻健男編著『図解　身近にあふれる「微生物」が３時間でわかる本』明日香出版、2019 年。
・清水博『＜いのち＞の自己組織』東京大学出版会、2016 年。
・髙橋祥子『ビジネスと人生の「見え方」が一変する生命科学的思考』ニューズピックス（NEWS PICKS)、2021 年。
・花村遼・田原健太朗『新型コロナ　収束への道』日経プレミアシリーズ 439、日経 BP、2020 年。
・永岡順『校長・教頭と教師の間―学校経営の再建（シリーズ教育の間)』ぎょうせい、1990 年。
・西田幾多郎著、小坂国継全注釈『善の研究』、講談社学術文庫、2019 年(初版 2006 年)。
・福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書、2007 年。
・福岡伸一『動的平衡３』木楽舎、2017 年。
・福岡伸一『新版　動的平衡』小学館新書、2018 年。
・福岡伸一『新版　動的平衡２』小学館新書 333、2018 年。
・藤田正勝『西田幾多郎―生きることと哲学―』岩波新書 1066、2019 年(初版 2007 年)。
・ウィリアム・H・マクニール著、佐々木昭夫訳『疫病と世界史』上下巻、中公文庫 1200、2007 年。
・峰宗太郎・山中浩之『新型コロナとワクチン　知らないと不都合な真実』日経プレミアシリーズ 450、日経 BP、2020 年。
・村上陽一郎『ペスト大流行』岩波新書 225、1983 年。
・山内一也『ウイルスの意味論―生命の定義を超えた存在―』みすず書房、2018 年。
・山内一也『ウイルスの世紀―なぜ繰り返し出現するのか―』みすず書房、2020 年。
・山内一也『新版　ウイルスと人間（岩波　科学ライブラリー)』岩波書店、2020 年。
・山本昭宏『戦後民主主義－現代日本を創った思想と文化―』中公新書 2627、2021 年。
・山本太郎『感染症と文明―共生への道―』岩波新書 1314、2011 年。
・山本太郎『疫病と人類』朝日新書、2020 年。
・吉森保『LIFE SCIENCE（ライフサイエンス）―長生きせざるをえない時代の生命科学講義―』日経 BP、2020 年。

注

[1] 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）WHO 公式情報特設ページ
https://extranet.who.int/kobe_centre/ja/covid　（最終アクセス日：2021/03/24)。

[2] 髙橋祥子「第４章　予測不能な未来に向けた組織を存続させるためには」『ビジネスと人生の「見え方」が一変する生命科学的思考』ニューズピックス (NEWS PICKS)、2021 年、148-190 頁。

[3] 髙橋、同上書、７頁。

[4] 髙橋、同上書、８頁。

[5] 山本太郎『感染症と文明―共生への道―』岩波新書 1314、2011 年、17 頁。
[6] 山内一也『新版　ウイルスと人間（岩波　科学ライブラリー）』岩波書店、2020 年、25 頁。
[7] 山内、同上書、44 頁。
[8] 山内一也『ウイルスの意味論―生命の定義を超えた存在-』みすず書房、2018 年、73 頁。
[9] 山内、同上書、73 頁。
[10] 山内、同上書、74-76 頁。
[11] 山本太郎『疫病と人類』朝日新書、2020 年、64 頁。
[12] 黒木登志夫『新型コロナの科学ーパンデミック、そして共生の未来へ―』中公新書、2020 年、24 頁。
[13] 吉森保『LIFE SCIENCE（ライフサイエンス』―長生きせざるをえない時代の生命科学講義―、日経 BP、2020 年、第 2 章のタイトル、75 頁。
[14] 吉森、同上書、80 頁。
[15] 吉森、同上書、92 頁。
[16] 吉森、同上書、93-95 頁。
[17] 吉森、同上書、128 頁。
[18] 吉森、同上書、87-90 頁。
[19] 黒木、同上書、35 頁。
[20] 吉森、同上書、88 頁。
[21] 福岡伸一『動的平衡３』木楽舎、2017 年、13 頁。
[22] 福岡、同上書、15 頁。
[23] 福岡、同上書、16 頁。
[24] 丸山俊一・NHK「欲望の時代の哲学」制作班『マルクス・ガブリエル　新時代に生きる「道徳哲学」』NHK 出版新書 645、2021 年、114 頁。
[25] 丸山ほか、同上書、50 頁。
[26] 丸山ほか、同上書、98-100 頁。
[27] 池田善昭・福岡伸一『福岡伸一、西田哲学を読む　生命をめぐる思索の旅　動的平衡と絶対矛盾的自己同一』小学館新書、2020 年、52 頁。
[28] 池田・福岡、同上書、52-53 頁。
[29] 池田・福岡、同上書、53-54 頁。
[30] 池田・福岡、同上書、66 頁。
[31] 山本昭宏『戦後民主主義―現代日本を創った思想と文化―』中公新書、2021 年を参照。
[32] 人口は総務省の人口推計(2019 年)、面積は国土交通省国土地理院の「全国都道府県区市町村別面積調」（2020 年 10 月 1 日）、県内総生産、県民所得は内閣府の「県民経済計算」（2017 年度）から算出した。
[33] マルクス・ガブリエル著、廣瀬覚訳『新実存主義』岩波新書、2020 年、16 頁。
[34] マルクス・ガブリエル、同上書、19 頁。
[35] 山内、『新版　ウイルスと人間（岩波　科学ライブラリー）』、前掲書、79 頁。
[36] 山内、同上書、80 頁。
[37] 山内、同上書、84 頁。
[38] 加藤崇英「識者インタビュー①　「コロナ禍」に焦点化するのではなく危機管理の一部と捉えたマネジメントを」『総合教育技術』2021 年 2 月号、12 頁。